

屋根概説

(五)

第六卷

第三號

一六

四八

文學士 藤田元春

九、其他の屋根

以上述ぶる所は主として我國もしくは東洋に存する屋根に關してのべたのであるが、緒言の中で分類した方錐の急なゴシク風の尖塔とか、圓屋根又は葱頭風のものに至ては概観すれば、我國は勿論過去の東洋には無かつたものらしい。

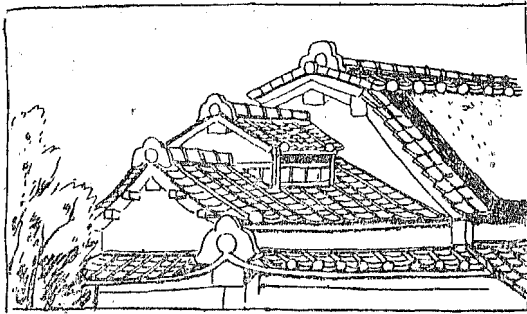
過去の日本には猶この外に大陸屋根といふ風の頂上の平い又は緩漫な波狀の土の屋根や或は南支那から暹羅へかけて殿宇の特色をなしてゐる飛簷式と稱する軒の無暗にそりかへつたのも少ない。

第三十圖



蘇州寒山寺碑亭

附圖第三十は蘇州寒山寺の碑亭で楓橋夜泊の詩碑が立つてゐる、雨よけであるが軒のそつたのが面白いのでこゝに出したのである、此圖の瓦屋根は瓦の本葺のやうに見えるがこれは日本のやうな丸瓦でなくて平瓦と同じ形の、瓦せんべいといった菓子形のものを、何枚となくかぶせたものである、支那には本葺のかはりにこの形の弧瓦を牝牡交互にかさねるのである。日本ではこの形式の瓦は勿論唐様建築の外屋根にこゝいふ弧形を出すことが



北河内菅原村長尾寺島氏邸
北河内菅原村長尾寺島氏邸

少なく、入母屋の破風口とか、檜皮葺殿堂の隅棟の葺き合せ等に、多少とも「てりやね」氣味のカーブを出す位が關の山で、神社建築で神明造の流れの屋根、或は鎌倉時代以後の唐破風などに美しい緩曲線を出してゐるに止まり、民家としては殆んどすべてが直線の手法を一步も出でない。しかしこの直線を應用してマンザートに似た勾配の違つた屋根二つを組合せて凸形二段屋根をつくつたものが河内にある。就中北河内で門真村の幣原坦氏邸の如き其尤なるものである、附圖は幣原氏の

家に似た北河内郡菅原村長尾の寺島氏の邸で、これを臺棟づくりといひ、茅は本葺で厚さ四尺に達する。日本民家の屋根の中で尤も高尚で尤も高價なもの、一つである、今氏はこの種の屋根を同じく河内の國暗峠附近で見、其の繪をかいて、評してこれは特に設計して作つた別荘ではなく、この地方の極くあたりまへの農家である云々

と記してゐられるが、實はあたりまへの家でなくて素封家でないといふ作らない屋根である、さきの「つのや」の工夫の外に恐らくこの凸形二段屋根は、日本の農民の工夫した尤も優美な屋根と見るべきでなからうか。

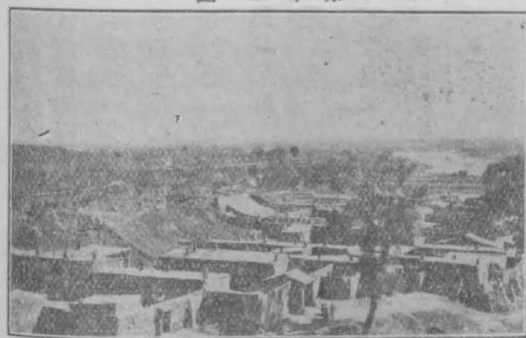
猶この外に支那では、北京に天壇といふがある、この天壇は天を祭る大理石圓壇の外に、皇穹宇といひ又祈年殿といふ二つの圓いプランの大建築物があつて、

圓錐形の屋根を持つてゐるのが、北京での特種の屋根として世人の注目する所となつてゐる。

日本でも過去にこの種の圓堂をつくりたい希望はあつたと見ゆる、しかし圓い屋根は得つくらないで、奈良の南圓堂の如く、名目だけは圓といひながら實は八角のプランにしてゐるので、屋根も三角錐の集りになつてゐるに止まる、要約すれば我國の屋根は直線を主體として、稀にてりやねむくりやねのカーブを加へてゐるに過ぎないで、外國の如く豊富な曲線の應用は少い、しかし明治五年はじめて東京銀座通に西洋風築建の煉瓦建が入つてこの方、京濱京阪の間ではいろいろ流儀のかはつた屋根が見られる、鐵筋コンクリートの平屋根をはじめ、マンザート屋根などもあれば、或はゴシック風の屋根やドームが出来だしてきた、明治時代に出来た六甲の二樂莊のごとき其好例であらう最近の文化住宅とやらいふものも、やはりこの手法を用ひて間取もかはり、屋根も形式傳統を破ることになつた。

思ふにかの大陸屋根なるものは勿論雨の少い砂漠地方の屋根で、波斯やアラビヤ邊の廢墟の到る所に之を發見するのであるが、支那でも北方にゆくと、この風が多く張家口から包頭附近の土屋はすべてこれである、(附圖第卅二併し雨の多い所にゆくと屋根が急になる、即ち江南から山東は片流、切妻又は入母屋の急な屋根に變るのを例とする。

圖 二 卅 第



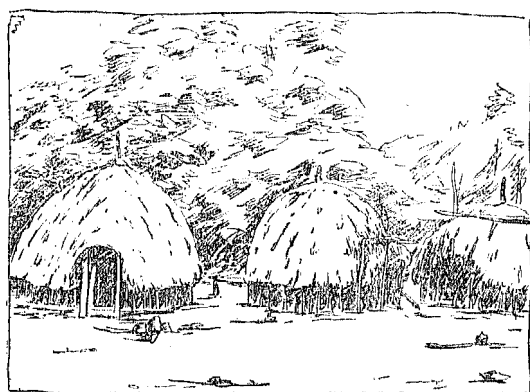
家 民 外 郊 頭 包

平屋根が大陸乾燥地に生じたと同じやうに圓い方の屋根も亦西方のものである。蒙古人の住宅を平地泉の北方でみると蒙古苞ツルケルといふ天幕の原形を失はないで、平屋根と圓筒形の土屋とを併せ有してゐる、蓋し圓屋根は蒙古では天幕の形の保存である、併し支那へこの圓屋根を將來したのは、蒙古人ではなくて多くは清真寺と稱する所の回教建築である、暹羅、ビルマから印度にかけて、多くの堂塔が複曲線を有し、又はドームを有してゐるのもやはり回教建築の影響である、回教建築の特長はアーチの應用の多いことであるが、回教徒のアーチはずつと古い波斯薩珊王朝からうけついただけのだ、古代のローマではエトルスカンが初めてアーチを用ひたと稱せらる、このエトルスクは東方から之を傳へたらしいので、つまりアーチなるものは其起源がメソポタミヤの古代にあると考へらるゝものである。

回教徒出るに及んで、或は圓筒或は葱頭の屋根と自由自在にこれを用ゐて、西は太西洋より東は太平洋岸に、北はシベリヤ内部より南はアフリカの内地にまで、其の宗教の廣布と共に回教建築の形式を廣めたのである、回教の傳來以前に支那に西域との交通があつてエンタシスなる柱の如き奈良朝以前に東漸した、次で鎌倉時代に唐様の建築が傳はり瓦燈口などいふアーチ形の窓が禪宗と共に我國にも入つた。しかし到底回教建築に見らるゝドームは我國には入らなかつたものである。

然らばこの圓い屋根はどこに起つたかと云ふに、回教建築の始祖をなすものは、シリアのハウラン沙漠の中に起つたガサニード侯國の建築に始まるといはれる、蓋しサラセン人は岩石と砂土とのみを材料として、やはり天幕の形からこれに到達したものと考へられてゐるらしい。(工業大辭書

第 三 十 圖



パングラの居民

が、かのアラビヤ人のドーム建築であるのであらう。予は建築に關しては勿論全くの素人であるから、建築の細部に於ていかやうの東西の區別のあるかを知らない、たゞ感じたまゝを備忘録として記すに止まる、この點讀者の寛恕を仰いでおく。

さて以上で大方屋根といふものゝ形式はのべ終つたのであるが、更らに我國の民家を研究せんとする上に於て、材料の上から見れば主として茅葺、板葺、瓦葺の區別がある、各地に其分布も廣い故に、今この各々に就て概説して以て一先づ本篇を結末にしようと思ふ、もしそれ屋根の細部に至

サラセン建築參照) しかし必ずしも天幕生活に限るにも及ばぬと考へるのは、現にアフリカ、スーダンの Yambio 人及アフリカ森林中に住む Bangala 土人の如き、全く草でふいた圓屋根の中に居る、蓋し木の枝を撓めて圓い屋根をつくることは尤も原始的な住宅として夙に西方に出現してゐたのであらう、又圓錐形の屋根は北方ザンベジの土人又は Nigeria 北方の土人の作くる所であり、同じくコンゴの北境には Ubangi の土人の如く草小屋の圓錐の尖塔をつくること恰も印度建築に見るが如きものがある、それは恰も我國の田舎で稻藁で積上げた圓錐堆のやうなものである。思ふにかゝる西方の原始的の簡單な圓屋根の發達したもの

つては改めて之を論じうる機會を待つのみである。

別 記

瓦燈口、くしがた、倭訓栞に曰く平治物語にくしがたの穴に人影のしつるを見え、徒然草に閑院殿のくしがたの穴と見えたり
櫛形の義、俗に云ふ瓦燈口是れ也、昔の櫛の形今と異れりぞぞ。

和漢三歳圖會、八一、圭寄、閨門、圭寶燈カトツ口カトツ今云瓦小門、閨音カトツ規宮中門、小者曰閨上圓下方如圭故曰閨門、禮記儒行注云、圭寄門旁小戸、穿レ牖、爲レ之、上銳下方而如レ圭故名、又名圭寶音豆、按俗云瓦燈口戶是乎、瓦燈即瓦器、上銳下廣、以納燈燭、似其形故名之、今茶道之圍室設小戸、多瓦燈口也、とあるが禪宗と共に傳來された瓦燈口は、かの清涼殿のくしがたもちがつて、上方のアーチ形がふかく火焰狀をなしてゐる、これが我國建築上に影響した回教建築の唯一の痕迹らしい。

一〇、草 茸

我國では古來草屋が普通であつた、神代に鶺鴒草茸不合尊といふ御神の名さへあるのであるから
皇室の御祖先でも草屋に住せられたのである、古事記を見ると訓葺草云加夜とあるにより、葺く草を總じてカヤといつたのである、草野姫尊とあるをカヤノヒメノミコトと申奉るから或はカヤとは草といふ語の總名のごとくにも聞える、けれども上古から屋を葺く草をカヤと云つたと見る方が正しいらしい、しかし通常今日になつて我々がカヤと云ふ語を聞くとそれは葺草として尤も多く用ひらるゝ茅カヤだといふ風に考へるが、其又茅にも種類がある、春期ツバナと云ふ白毛の花を出す茅チガヤであり、山の奥へゆくと刈安カリヤスと名づくる菅茅スゲカヤもあれば、秋期尾花をさかす所の薄ス、キも亦カヤである、蓋し茅カヤには種類が多い、これらの多く用ひらるゝカヤの類は原野河畔もしくは山の林空地に産するもので、適宜に地の宜しきに應じて葺草に用ふるので、予の如き山間のものはカヤと云へば尾花の

さくスキだと考へることに慣れてゐる。かの兼好が

一夜ねしかやのまろやの跡もなし、夢かうつゝか宇津の山越

とよんだところの山間の茅はこれである、この種のチガヤ、スキの類は普通に山萱ヤマウガヤと稱せらるゝ、しかし我國は豊葦原の名に負ふごとく古來海邊湖畔に多くの蘆葦が自生する、これ又以て葦草の好材料である新古今や、續古今を見ると旅ねするあしの小屋にて見るときもとか、夕ざればあしのまろやにとか或はわがいほは難波なるあしのしのやとか歌つて、至る所にあしの宿などゝ記されてゐる草屋がある、この方はかのかやのまろやと違つて、全く蘆アシでふくので俗に海萱ウミウガヤといふ者である、古事記傳十七には新井氏の説だとして鶉葦草ウツガヤといふは日向の國で海岸の萩ハギである今日うみがやといふからそれが昔のウガヤであらうと記してある、難波の葦は伊勢の濱萩といふとほり今日も蘆アシを海萱ウミウガヤといふのである。かやうにして我國は山間海岸何れもこの葦草には事缺かないのが例であつたが、近年人口増加に伴ひ土地の開墾、もしくは河川の修理等日を追ふて進歩したので、葦草を上記の山萱又は海萱にするといふことは餘程困難を感じるやうになつた、例令ば大阪平野で茅の産地といへば御幣島ミヘジマ稗島ヒジマ一帯のデルタに産する所謂海萱ウミウガヤであり、山城巨掠池畔では多くの過去の葭島といつた洲の湖萱ウミウガヤ、それが誠に質の良いふきくさであつたのである、併し今日は新淀川附替、巨掠池開拓等のために、これらの多くの産地が全くなり、同時に其地方の開發が蘆の自生地たるを許さなくなつてきた。

尼ヶ崎附近は今でも多少葦草カヤの産地であるが、其質は過去の御幣島産に及ぶべくもない、故に腕

艇たる淀川堤防のそこゝに産する葭藎を集め、漸く數年の後其材料を充たすに足る有様で、巨椋
 池中の葭島のごときも、すべて稻田になつたが、獨り小倉村伊勢田にカヤ吉と稱する家がある。へ
 北川玉城氏こゝは今も昔のごとく自家の葭島を所有してゐて、同時に先祖傳來葦の用達として諸家
 に出入し、皇室の御用又は神宮御用を奉仕してゐるのである。故に平民でこの葭島産の材料を以て
 家をふくといふやうなことは、今日では餘程贅澤であつて、山城平野の中でも特別の名門素封家に
 して且累代カヤ吉を出入としてゐる家でないどころこれをつくることが出来ない、そこで當然このカヤ
 葦といふものは、瓦葺よりも却つて高價となつてきだのである。故に地方一般では、葦草として稻

藎または麥藎を用ふるやうになつた、或は茅がなくて笹があ
 れば笹葺にするといふやうに各地各其の手近に得られる材料
 を選ぶといふのが現状である、滋賀縣伊香郡蒲生郡邊では茅
 の不足した結果として、稻藎を以て屋根をふくが、丹波攝津
 邊では麥藎を以て茅に代へる所が多い。茅葺だといつても茅
 の不足した丈けは麥藎を以て之を補ふ、それでも猶葦草に不
 足した場合に、その不足のまゝに簡略葺といふ葺方にするも
 のがある、これは丹波邊で鳥羽葺トリハといふものである、今和次
 郎氏の民家の研究に土佐海岸地方の特色として、疣のある屋
 根といふのを記してゐられるが、茅をふくに當つて捶竹にし

圖 四 卅 第



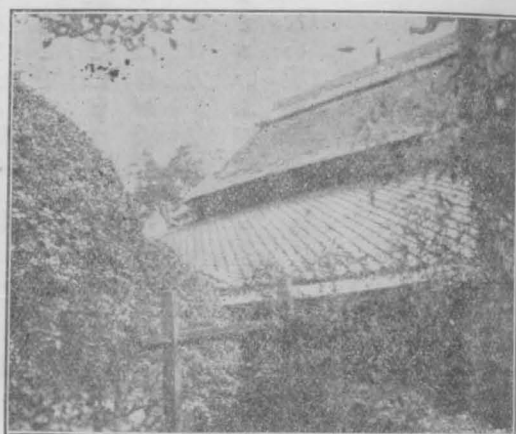
知須郡井船波丹 葦バト屋母入

ばりつけた縄目は、ふき艸の多い屋根では、自から其上部にくる葺脚フキタのためにかくれて、其針目が保護されるけれども、草の薄い場合にはさうはいかない、そこで茅を下の捶竹に結びつけた針目をかくすために屋根の上部に一束づつの針目覆をのせる、しかるときはそれが疵になつて現はれる、附圖第卅四は其疵が半ばくさつたので目につかないが、このトバ葺なるものゝ一例である（丹波船井郡所見）

幸に茅の材料が多い時にはかゝる疵をつくる必要もなく完全な葺方になる、この際新しい草と古い葺草とを併用すると屋根に虎皮のごとき段々縞が出来て却つて美觀を増すのが例である。茅の尻を缺んで整へる際に屋根の末端を部厚に見せるやうに、地平に對してある角度を持つた屋根をつくることは近畿の特色であるが、屋根の末端を地平に併行に缺んで一見して屋根の部の厚さを現はさないのが東國に多い、これは必しも左様と定つたわけではないが、各地各其特色を有してゐることと思ふ。

茅葺に切妻、入母屋、四阿の別があるが、予の見たる茅葺として最も進んでゐるのは其ふき艸の多い地方に出現した葺屋根で北河内郡門真村の六人衆と呼ぶ其地の地主連中の建てゝゐる大和屋根又は臺棟造りといふものである、六人衆は自から財産もあり格式も高いので百姓又は下衆と稱するものゝ民家よりも、一段上等な家屋をつくつたので、間口十三間奥行六間にもあまる宏大な葺葺の家屋をたて、其宅地には土藏及小屋、門長屋練塀の類を圍ぐらして宛然一城廓の形をなしてゐる、就中其庄屋であつた野口作右衛門氏の母屋のごときは大和棟塀造茅葺であつて（附圖第三十五）茅の

第三十五圖

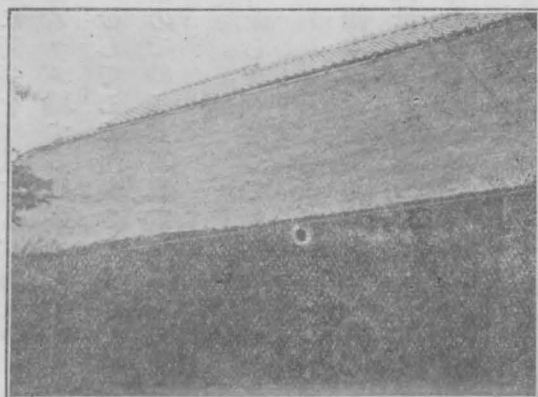


河内門眞野口氏屋根

厚さ驚くべし五尺にも達してゐる、門眞一番の幣原坦氏の宅の如き同じ類に屬する、四尺以上の厚さある厚葺はこの門眞のみでなくて淀川を挟んだ畿内平野の農家の特に名門であつた家に多い、今日これをふくには數千束の葺草を要する、全部を瓦でふくよりも非常に高價につくといふことである、見た眼にも檜皮葺の薄いのよりは遙

かに優美であり且高尚でもある。中で尤も優秀なるものゝ一例をあ

第三十六圖



蘆 厚 葺
綾 喜 郡 伊 佐 邸

ぐれば、山城綴喜郡上津屋の豪農伊佐郷右衛門氏の邸である、記録によれば少くとも明和四年以來火災に逢つてゐない古い家で大和風の臺棟造である、野口氏と同様に湖葺で葺てある、其材料は前記巨掠池畔伊勢田のカヤ吉事北川氏が、祖先相傳で差入れる、注文をしないで古い帳面をくつて北川氏の方から今年は何束送りますと云つ

てくるのださうな、この家の屋根は厚さ六尺五寸、十年ごとに新茅を挿入する、あまり部が厚いので下から葺かへが出来ない、巨掠池の葭島に産する特産のあアヤメ稱する細茅とシノと稱するやゝ太い蘆を交せてふくので、細美帶紅白色の葺草に青い苔がむしてゐる優美さに至つては恐らく天下稀觀のものであらう、カヤ葺の最も進歩した極致だと思ふので特に其寫眞(第卅六圖)をかゝげておくのである。

しかしかやうな近畿の高尙なカヤヅキも其葺草が段々と生産しなくなつてきたので、これを維持することも漸く困難であるらしい。

そこで近來地方にゆくとこの入母屋茅葺の表面を亜鉛板の張りボテに圍んだ家が増加してきた、或はこれをタールで直黒に塗つたのが多い、格好は過去の入母屋をそのまゝに表現はするが、雨ふりには音が騒がしい、見る目には殺風景である、寧ろ瓦葺にしてほしいと思ふがこれも亦時代の變遷で仕方がない、尤も甚しいのになると亜鉛でなくて、スレートの下にしく瓦下の絨(俗に便利瓦なごゝいふ)のまゝで黒い屋根にしたのがあつたりする、(江州志那所見)これ亦時代の變遷で仕方のない現象であらう。(未完)